



「金沢箔の将来と イノベーションへの思い」

(株)戸出惣次郎商店
専務取締役

諸江 泰彦

金沢箔との関り

私は、1981年箔問屋に就業致し、金沢箔に携わる事となりました。入社当時、業界は大変活況で毎日社長に言われるがままに仕事をこなす日々でした。仏壇、仏具をはじめ西陣や漆器関連も大変活況でした。毎日が出荷に追われ、朝出社するやいなや、薄刃を研ぎ銀箔や金箔、アルミ箔、洋箔などを午後3時頃まで断ち切る作業をし、それから包装、荷造りをこなす日々でした。

4～5年が過ぎた頃、ようやく断切(たちきり)金箔と縁付(えんづけ)金箔の検品などをまかせていただき、価格を決めるようにもなりました。私自身、漆器関連の出張先が多く、金箔の品質を意識し始めたのは、西陣や仏壇、仏具関連の出張が多くなったこの頃でした。

それから25～6年の月日が経ち、社会情勢や経済環境が大きく変わり、我々の業界もこの変化にはついて行けず事情は一変しました。5年程前から、金箔の需要が急激に落ち込み始め、約80%以上の需要先である仏壇、仏具業界に大きな変化をもたらしました。いわゆる金箔を使用した金仏壇から割安な唐木仏壇や現代仏壇への移行とも言える変化でした。加えて、若者の宗教離れなどもこれに拍車をかけました。

過去を振り返ってみると、私がこの業界に入って以来、目に見えない形で緩やかに日本経済が下降を続けてきたように思います。5年前のサブプライムローンの破綻で世界経済が減速し、東日本大震災でそれに拍車をかけるように我が国の流通経済が急減速しました。しかし、金箔業界存続の危機を向かえている今日、400年もの歴史を途絶えさすことのないよう、箔業者の一人として知恵を出し、周辺の状況に応じて臨機応変に前進していかなければならないと思っております。

研究所との関り

金沢市には、2010年に移設した金沢市立安江金箔工芸館の3階に「金沢箔技術振興研究所」を開設していただき大変ありがたいと思っております。研究所においては、箔の品質向上をはじめとして、これまでに調査されることのなかった箔の物性や諸外国の箔との比較、後継者育成や歴史の調査などが期待されます。所長を始め、研究を委託している大学の先生方には、大変心強く思うところであり、業界がかかえる技術的問題点をご集約して、緊急性を要する案件から順次調査、研究をお願いしているところです。

金沢箔に携わる職人は、人間の持つ五感を駆使し、箔を打ちあげ、箔を検品し断ち切っています(断切箔の場合)。今日までに機械化されたものは箔打ち機械だけで、それ以外はほとんど昔と変わらぬ手作業です。それが伝統と言えばそうかも知れませんが、やはり箔に従事する人も少なくなり後継者も少ない現状では、機械化出来るものはそうするのが望ましいと言えます。箔打紙や澄打紙の原材料であるガンピや三つ又、楮、そしてニゴ(稲の芯)などの天然素材の調達も難しくなってきた今日、研究所にはこれらの紙の科学的根拠にもとづく代替品の研究開発や、24年度から省力化のための断裁機の開発にも力を注いでいただいています。これらのひとつひとつの積み重ねによって金沢箔の伝統を継承していけるものと私は確信しています。



金沢箔の将来への思い

新たな需要の開拓に知恵を絞り、金箔を使っていただく事が急務と考えています。全国の生産量日本一の金沢から、「箔のまち 金沢」にふさわしい印象深いものが良いと思っています。全体で取り組み行動を開始しなければなりません。例えば、一般公募をして「どのような物に金箔を使用したら良いか!」など、若い人達の意見を取り入れながら、金箔の魅力を若い人達にも知っていただくことが特に重要だと思います。

一方、文化財保護の観点から言うと、毎年国家予算で多くの文化財が修復がなされている事は言うまでもありませんが、それに携わる多様な職人を育成することが重要であると思います。我々の業界も後継者不足に悩んでいますが、これを最重要課題として取り組まないと、日本固有の文化と文化財を喪失することになることを、肝に命じておかなければなりません。

諸江泰彦(もろえ やすひこ) 略歴

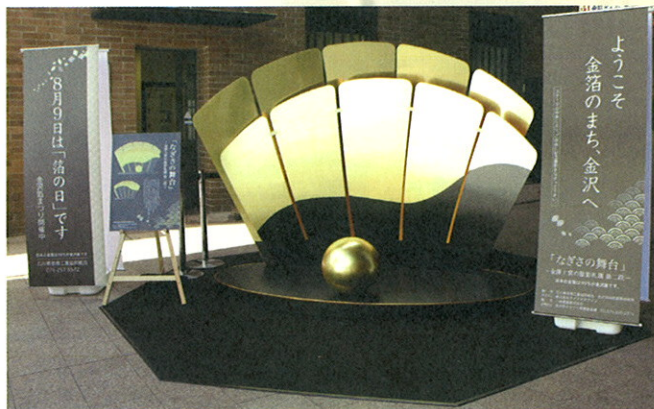
- 1952年 石川県金沢市に生まれる
- 1975年 高千穂商科大学卒業
- 1981年 (株)戸出惣次郎商店 入社
- 1999年 (株)戸出惣次郎商店 専務取締役 就任
- 2004年 石川県箔商工業協同組合 常務理事 就任 現在に至る
- 2010年 金沢箔技術振興研究所 運営委員 就任 現在に至る

Topics.1 「なぎさの舞台」—金箔上質の陰影礼讃第二段— が完成

「かぐやの舞台」に続き第二作目が完成しました。その名は「なぎさの舞台」。これは、2000枚の金箔伝統箔（金箔）と、最先端材料である炭素繊維を使用した複合材料とのコラボレーションによるもので、平安時代の遊戯であった「貝合わせ」を意図したステージオブジェです。素材がもつ格子状の模様が、金箔表面に現れており、金箔の輝きを四方八方に反射するため、淡い黄金色として輝いています。また、貝と貝の合わせ面は、金箔どうしが反射しあい、淡い輝きを生み出しています。金箔の特色を効果的に演出した、雅やかなステージに完成しました。

このオブジェは8月に行われた金箔まつりの期間に初披露となり、その後もJR金沢駅や金箔海みらい図書館、金沢市立泉野図書館などで展示され、県内外の大勢の方々から称賛をいただきました。

（かぐやの舞台・なぎさの舞台に関するお問い合わせは、金沢市クラフト政策推進課(076-220-2373)までお願いします。）



Topics.2 おしゃれメッセ2012 <SUTEKI' 12~かなざわ工芸物語~> — レポート

金沢の伝統工芸品が一同に集まる見本市「かなざわメッセ」が平成24年10月5日(金)~8日(月・祝)しいのき迎賓館で開催されました。金箔箔をはじめ加賀友禅、加賀織、金箔漆器などの新商品が展覧・販売されました。昔からの伝統技法が現代の洋服やアクセサリ—そして食器に生かされ、来場者の感動を集めていました。



おしゃれメッセ2012 <100人×100品展> — レポート

302人の市民が「欲しい」「贈りたい」「勧めたい」の想いで選ばれた金沢の伝統工芸品が平成24年10月10日(水)~14日(日)金沢21世紀美術館で展示されました。金箔箔や加賀毛針などが現代の生活用品に適用されている数多くの作品が紹介されていました。



研究者紹介



金箔箔技術振興研究所は、定期的に研究所が関わっている研究課題や研究者について、ニュースレターに載せて情報発信しております。

本号では、ロボット工学やメカトロニクスを専門とする、関 啓明 准教授を紹介いたします。

委託研究課題 断切金箔製造工程の合理化に関する開発研究
—金箔/箔合紙積層体の裁断機の開発について—

研究内容(目的) 断切金箔製造の最終工程に、金箔/箔合紙積層体の裁断があります。現在、箔職人の高齢化に伴い、その作業の継続が危惧されています。本研究は、従来の手作業に替る自動裁断機の開発を目的としています。

研究者紹介： 関 啓明【東京大学大学院工学系研究科 精密機械工学専攻博士課程修了 博士(工学)】

研究者所属： 金沢大学理工研究域機械工学系 ロボティクス研究室

研究分野： ロボットの機構やセンサシステムに関する研究、様々な自動化装置の開発、新しい福祉機器やヒューマンインタフェースの研究開発

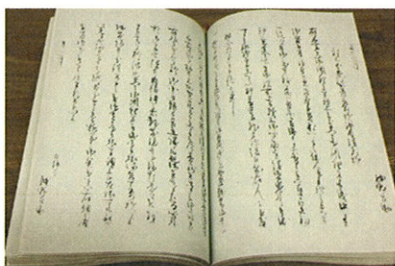
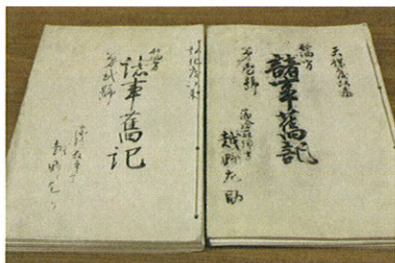
研究室紹介： 本研究室では、「センサ」と「メカ」をキーワードとして、ロボットから自動化装置、福祉機器に至るまで幅広く研究対象としています。いずれにも共通する考え方は、新しいアイデアでちょっと賢い機械装置を開発し、人の作業を支援することです。

金沢箔の起こり

金沢箔の開産は、歴史家によれば「京都の箔打ちが移入されてはじまったもので、その時期は安土桃山文化の時代、織豊政権の末期、16世紀後半であった」とされるが、その後の戦国動乱期を経て江戸時代初期(17世紀初頭)までを除けば、箔の打ち立て(製造)と売り捌き(販売)は、徳川幕府の箔政策によって金座・銀座(のちに箔座)の厳しく統制された幕府直轄の業となっていた。そのため、江戸、京都、尾張、会津を除く全国の地方より、箔の製造販売は、いったん、完全に途絶えてしまうのであった。

では、金沢での箔の再興はいつか。また、その契機(きつかけ)はなんであったのか。これを知る唯一の現存史料は、越野佐助なる人物が遺した文書『箔方諸事旧記』(石川県箔商工業協同組合所有/以下、佐助文書と記す)である。

それゆえ、以下、主としてその文書によつての叙述になるが、文化5(1808)年、加賀城下、城をも襲う大火に見舞われ、城の二の丸、御殿なども焼失し、その再建に要する金、銀箔が幕府割り当ての箔量ではとても足りない状況となる。そこで加賀藩は、焼失した



箔方諸事旧記

城の分につき必要な金、銀箔に限り、京都から職人を招き、加賀藩領内打ち立て許可を幕府に願い出るも、幕府からの回答には箔座からの「損傷箔打ち直しはよしなとする」という達しはあったものの、正式認可を得た形跡はない。にもかかわらず、藩は焼失した城の建造物等に必要な箔量を十分に調達し、まかないきっている。これは、要するに、「打ち直し」の他に不足分の箔を勝手に打ち立てていたことを物語るものではないか。そうであれば、百万石の雄藩であったとはいえ、歴史家が指摘するごとく「鼻毛をのばして阿呆面をし、幕府の警戒心をそらすのに腐心した藩主の逸話まで生んだ加賀藩、それだけに、幕府の意図を察するのに敏感で、その意に副うのに汲々としていた外様大名の加賀藩」(下出積与)の、幕府に対するそれまでの態度、姿勢からすれば考えられない変化であって、すでにこの時代、幕府権力弱体化の程が推し計られる。

江戸後期、事態がこのように動かなかで、佐助文書は「京都の渡り職人から製箔技術を習い覚えた伊助」なる職人が、新たに加賀金沢の地において「箔業を興した」と記す。しかし、「伊助自身は良質の箔を打ち立てることができず、程なく廃業する」も、その弟子たちが、佐助もその一人であったが、その後も奮闘努力して試行錯誤を重ねること11年余、文政2(1819)年、「ついに良質の箔の打ち立てに成功した」と佐助文書は伝えている。

そうした箔工たちを、加賀藩は幕府に抗して、藩が誇る「百工比照の細工所」に寄せ集めて組み込み込んでいく。云うまでもなく、藩専用の箔を打たせるためである。が、同時に、そ

れは箔工たちを保護育成する施策ともなった。そればかりでなく、そういうなかで、腕のいい職人で細工所の棟取りともなると、名字帯刀を許され、御徒(おかち)の藩士と同等の身分を授与され、社会的威信と地位の上昇をもたらすことにも与った(越野を名乗る佐助もそういう一人だったのかも)。

その当時、箔の打ち立て、売り捌きは、徳川政権の弱体化とともに、すでにかなり名目化していたとはいえ、依然として幕府の独占するところで、公的には認められていない。それをなすは「隠し打ち・隠し売り」とよばれ、すなわち「密造・密売」にあたり、それを侵すは厳禁にして犯せば厳罰というなか、「藩用に限る」とするも、幕府に抗してなした加賀藩箔工に対する処遇は他藩に類例を見ず、まことに画期的な施策であった。

箔職人自立への動き

加賀藩が箔業者にとつたこの態度と処遇は、それまでのことを想えば、工人たちにしても、大歓迎にしたところであったにちがいない。けれども、それが、職人としての「根底からの解放」と商人としての「自由な営業」に接続し発展しないことも明白である。だからしてまた、かれらにしても、この矛盾に目覚めるに時日はかからなかった。ほどなく箔業者たちは「箔の打ち立て、売り捌き自由公認運動」を展開するようになるからである。そして、その運動の先頭に立った指導者もまた、越野佐助その人であった。

しかしまた、佐助たちの運動は、その後長く40年近くもの歳月を要し、半ば功を奏したともいえる一方、完全には成就しなかったともいわなければならない。なぜなら、結局のところ、それは加賀金沢での「箔打ち公認権」を藩用に限って幕府が認めるということで終息をみているからである。加賀藩としては心理的にせよ「幕府に抗する」必要もなくなり、文字通り「願ったり適ったり」の幕府裁定であったにしても、箔業者からすれば、完全自由生産営業権の取得にまで到らなかつたのであるから。

ともあれ、この変化、運動の成果は、幕藩体制の命運燃えつくわずか4年前、元治元(1864)年のことであつた。

その4年後、明治維新が成り、新体制の下、古い職人組



箔業祖記巧碑

織が新しい法律(維新政府による商法改正)によって全国的に解体されるなか、加賀藩細工所も解散、箔業も完全に解放されて自由営業となる。ただ、維新の動乱期は混乱期、箔業も不振をきわめ、その製造販売が活況づくのは明治5、6年以降のこととなるが、今日にみる金沢箔産業の社会的原型は、こうして確立を見る。また、佐助らは、その功により、後世に「箔業祖」として崇められ、かれらを讃える「箔業祖記功碑」が金沢市卯辰山に建つ。それは1934年9月のことであつた。

安江孝司(やすえ たかし) 略歴

- 1941年 金沢市に生まれる
- 1965年 法政大学卒業
- 1971年 同大学大学院社会科学部研究科社会学専攻博士課程満期退学
- 1971年 同大学教員
- 現在 同大学沖縄文化研究所客員研究員

<論文>

「伝統の町と職人の(復活構想)—金沢でみられる論議をとらえて」、季刊「地域」第4号、大明堂、1980)他

エクステリアへの箔塗装

屋外の構造物に箔押し塗装する場合、従来の工法では2、3年で金箔塗装が完全に剥げ落ちるため、特殊な工法が必要です。屋内の箔押しであれば、金属であれ木製であれ何の問題もありません。しかし、屋外となると話は別で、木製素地の木部は湿気をおびやすく、塗下地が溶けて金属よりも早く剥げ落ちます。ではなぜそのような違いが出てくるのか考察してみましょう。

木材の場合は、木地の裏側からの湿気により塗下地を溶かしてしまうことがハッキリしているため、外面に金箔を貼ることは不可能です。一方、金属の外面への金箔貼りについては古来より水銀によるアマルガム法があります。しかし、この方法は毒性のある水銀が人体に悪影響を及ぼすため、現在は伝統技術継承を目的に2、3行われているだけで現実には無理と言えます。

さすれば、金属地と箔とを繋ぐのは塗料、いわゆる接着剤ということになります。古来よりこの接着剤はすべて有機塗料です。有機塗料の原材料は動植物から抽出されたものです。例えば、ニカワは動物の軟骨、ウルシは樹液、カシューは植物の種脂、化学塗料はすべて石油を原料としています。石油も元は動物の脂が化石化したものです。

有機物はすべて太陽光の紫外線によって組織が破壊されます。ここが最大のポイントです。箔押しされた接着剤は時間の経過と共に硬化が進み、やがて紫外線の影響を受け、散り散りにひび割れていきます。それでも金属素地に定着しておれば遠目には良とします。

もう一つのポイントは、金属本体が直射日光を受けたり気温の上昇により、内部に熱を蓄積し膨張することです。それゆえ、素地は外気温の変化に応じて微妙に伸縮を繰り返し、これが原因で硬化した塗料との間に亀裂が生じ、やがて剥がれ落ちてしまいます。このことからおそらく先人も幾度か挑戦してはみたものの上手く行かず失敗したのではないかと推測されます。

今まで水蒸気と雨露に晒されるせいだと思われてきた金閣寺については、外壁と内側では傷み具合が全く違うことから分かります。こうした理由から、みちのくの中尊寺金色堂では、接着剤の劣化の原因である紫外線や気温の変化による熱膨張・熱収縮から守るためにも更に建物で囲ってあるのです。日本は「黄金の国」と言われながら多くの建造物外部に金箔が使われてこなかったのは、この有機塗料しか選択する余地がなかったからなのでしょう。以上の理由から、屋外建築やモニュメントに箔塗装する場合、有機塗料は接着剤として使えないことになります。

それでは無機質の接着剤がないのか、という点に着目して利用しているものがあります。例えば七宝焼の金と銀などです。絵の具(釉薬)に箔をつけて700℃くらいの窯に入れしばらくすると、絵の具(釉薬)が溶け、箔が包み込まれます。いわゆる釉裏金彩や釉裏銀彩といわれる技法です。陶磁器の絵付けにも使いますし、ガラス工芸に使う金箔・銀箔も同じです。いずれも釉薬やガラスの成分である石英を上手に利用しているのです。石英がガラス質に変化し、箔を定着させるには高温で作業を行う必要があります。そのため、素地は不燃のものに限定されます。その際、高温を保持し続けなければならず、高温窯とそこに入れる物には限度があります。ここで注意しなければならないのは、焼き付け塗装という技術です。これは急速かつ究極の乾燥法であり、高硬度の箔塗表面を得るためですが、使われる接着剤はあくまでもそれに適した有機塗料であることには変わりありません。

日本はおろか世界中の塗料及び接着剤はすべて有機材料です。無機質の塗料や接着剤は存在しないのです。しかし日本と違い外国、特に西洋では屋外でのモニュメントや建造物に金箔を使用している例が数多くみられます。では、どのように考えればよいのでしょうか。

今回は、西洋の金箔塗装法を紹介いたします。

(石川県箔商工業協同組合 顧問 恩地博文)



交通案内 ※当館には駐車スペースがございませんので公共交通機関をご利用ください。

- ・路線バス 一 金沢駅から北陸鉄道バス・JRバスで「橋場町」下車徒歩5分
- ・城下町金沢周遊バス 一 金沢駅東口のりば乗車「橋場町」下車徒歩5分
- ・金沢ふらっとバス(此花ルート) 一 金沢駅東口のりば乗車「彦三緑地」下車徒歩8分

金箔箔技術振興研究所 ニュースレター No.7

〒920-0831 金沢市東山1丁目3番10号 金沢市立安江金箔工芸館3階
TEL:076-225-8941 FAX:076-225-8942
営業時間/9:00~17:45 休業日/毎週土・日曜日、祝日および年末年始
<http://www.kanazawahaku-giken.jp> Email:kanazawa-haku@wind.ocn.ne.jp

きらめきの金箔雪吊り点灯

金沢市武蔵町で10月26日(金)、金沢の冬の風物詩、金箔の雪吊り「金箔きらら」が点灯されました。今年で25年目を迎える「金箔きらら」は、雪の結晶をかたどった金箔の飾り約3000枚がつるされており、夜の街にキラキラと輝きをはなっています。高さが12m、8m、6mの3基のツリーが並んでおり、周辺のケヤキ21本には発行ダイオード(LED)が取り付けられ、同時にイルミネーションとして点灯されています。来年2月17日まで点灯されます。

